

豊田市分科会

10/12(金)

足助交流館 飯盛座

挨拶・事例紹介

豊田市副市長

過疎地域自立活性化優良事例発表

宮城県／特定非営利活動法人ひっぽUターンネット

島根県／邑南町

豊田市副市長

幸村 的美

こうむら まとみ



みなさんおはようございます。豊田市の副市長の幸村と申します。本来であれば市長が参りまして歓迎のご挨拶を申し上げるべきところですが、公務で県外に出張しておりますので、代わって私から挨拶を申し上げたいと思います。

本日は、大変お忙しい中、全国各地から豊田市分科会にご参加いただきまして、まことにありがとうございます。昨日の新城からここまで結構遠かったんじゃないかと思いますが、よくおいでいただきました。心から歓迎を申し上げたいと思います。また、総務省の武居審議官様、山口室長様、全国過疎地域自立促進連盟の蓼沼専務理事におかれましては、わざわざ豊田市の分科会にご出席いただきまして、まことにありがとうございます。

さて、昨日の交流会でも少し申し上げましたけれども、豊田市は平成17年に周辺の6町村と合併いたしまして、面積にして918平方キロメートル、愛知県の約6分の1を有する広大な市域になりました。新しい市域のほぼ中心がこの足助になります。実際どれくらい広いかといふとなかなか数字で言ってもわかりにくいのですが、実は琵琶湖の面積が672平方キロメートル、佐渡島の面積が855平方キロメートル、それよりももう少し広いのですね、今の豊田市の市域は。ですから、愛知県の真ん中に佐渡島があると思っていただければいいのなかと申します。しかもその佐渡島の上半分ぐらいは過疎地域だというのが実際の状況でございます。そういう非常に、都市部から農村部、中山間地域まで有する多様性に富んだ都市となっております。皆様方としては、自動車産業とかそういったことが非常に有名ではございますが、コメ作り、モモ、ナシ、カキといった果物、こういった農産物がたくさん取れる、それが現在の豊田市で

ございます。

そんなことで、合併前から町村地域においては過疎化が進んでおりましたけれども、やっぱり合併してからも相変わらず過疎化が進んでおります。それと、もうひとつ、合併に伴って、同じ市内で中山間地域から都市部のほうへ人が移動するという、そういう新しい状況も生まれてきておまして、まだまだ過疎に対する取組は豊田市の大きな問題でございますので、豊田市においては合併以後、都市と農山村の共生というテーマで様々な取組を進めているところでございます。

また、このあと、取組事例の紹介等もあると思いますが、そんなことで、豊田市も一生懸命、過疎地の皆さんと同様、そういった問題について取り組んでおるところでございます。

本日の豊田市の分科会はテーマを「田舎においでん～魅力ある山里と都市との共生～」としております。この「おいでん」というのはこちらのほうの方言でございますけど、過疎問題と向き合って一生懸命取り組んでいる私たちにとって本日の分科会でいろいろためになるお話がたくさん聞かせていただけるのではないかと、私も期待しております。

午後からは現地視察ということで、香嵐溪の紅葉で有名な足助地区の古い町並みを見学していただきます。この足助の町並みは愛知県下で今年初めて重要伝統的建造物群保存地区いわゆる重伝建の指定を受けまして、これからこの保存整備に向けて取組を進めていこうと思っておりますけれども、ここは昔の中馬街道といましていわゆる塩の道で、長野県の飯田のほうに続く道の宿場町ということで栄えておったところで、そういう古い面影を残す建物がたくさんございます。そういうものを大事にしていこうと思っております。今はまだ整備が進んでおりませんが、またいつか訪れていただきまして、きれいになった足助の町並みを見ていただくと非常に幸いと思っております。

終わりになりますけれども、本日のこの分科会が実り多いものになりますことを期待するとともに、全国各地で過疎問題に取り組んでみえる皆様方のますますのご活躍ならびにご健康ご多幸をご祈念申し上げまして、歓迎の挨拶とさせていただきます。本日は一日、どうかよろしくお願いいたします。

豊田市
総合企画部調整監

安田 明弘
やすだ あきひろ



それでは改めましておはようございます。豊田市の分科会へ、また足助の地に足をお運びいただきまして、まことにありがとうございます。私は、豊田市総合企画部で農山村振興担当をしております安田と申します。よろしく願いいたします。

早速ですが、豊田市の紹介を兼ねまして、取組状況を報告させていただきます。

まず豊田市の紹介からですが、先程副市長から紹介がありましたように、豊田市は長野県と岐阜県と隣接する人口42万の中核市です。面積は918平方キロメートル、愛知県で一番大きな町になっております。平成17年に足助町など6つの町村と合併しまして、産業都市でありながら森林面積が約7割という、日本の縮図のような町だということも言われています。

豊田市は合併により豊かな自然に恵まれました。先程紹介にあったような紅葉で有名な足助の香嵐渓ですとか、重伝建に指定された町並み、紅葉とのコントラストが美しい秋咲きの小原の四季桜、今年7月にラムサール条約に登録した湿地群ですとか、名産品としては猿投の桃、ギネスブックに登録されたジャンボ梨などの農産物がある、農業の盛んな町でもあります。そしてエコカーの「プリウス」のふるさとでもあります。

まず、農山村の現状と本市の取組の状況を説明させていただきます。農山村地域の現状ですが、都市計画区域の藤岡地区を除いた合併5地区の状況をお示ししたいと思います。人口につきましては7年間で約2,400人、9.3%減少しております、高齢化率も2.1ポイント上昇し、現在32.3%となっております。現在の年齢構成を考えると、今後も一層の人口減少、高齢化が進むと考えられます。本市では、総合計画において重点テーマのひとつである「都市と農山村の共生」を掲げまして、住み続けることができる、また人を迎え入れることができる農山村を目指して、市長を本部長として全庁の推進体制のもとで、農山村振興について重点的に

取り組んでいるところです。

施策展開につきましては、交流、定住などの5つの視点から取組を進めています。具体的には、例えば定住促進に関する取組ですとか、地域資源を生かした産業振興、事例が書いてありますけれども、例えば平成22年にスタートした「空き家情報バンク」では、足助独自の制度を合わせると33世帯77人の移住実績があります。空き家を待つ登録者数が246人にもものぼっている状況があります。また「農ライフ創生センター」、一番下に書いてあるところなのですが、こちらは大量の定年退職者を想定して新規就農研修を行うということで、卒業生には農地の斡旋を行っております。

また、集落機能維持に向けた取組では、例えば一番上の「集落ビジョン策定事業」、昨年、旭地区全35集落で、集落ごとにカルテを作って、合わせてビジョンを作るよう進めた事業であります。また、その下の「ソーシャルビジネス支援事業」につきましては、介護難民対策などの地域課題に対応する事業を応援するというような事業でございます。そして鳥獣害の総合対策など、様々な取組を進めています。

さらに昨年度から集落機能維持、とりわけ小規模高齢化集落についての調査を始めました。小規模高齢化集落とは、愛知県の定義では高齢化率50%以上、人口100人未満の集落です。豊田市の、先程の対象のところの小規模高齢化集落の集落数は平成22年現在で17集落あります。全部で211集落ありますので、その8%を占めておりますけれども、10年後には今のままの状況で推移するとしますと、約3分の1が小規模高齢化集落になると想定されています。

ここにありますように学術研究においても、集落限界化プロセスとして単に人口とか世帯が減少すればそのまま集落機能が衰えるということではなく、ある臨界点を超えると一気に集落機能が消滅に向かうということが指摘されています。もしそうであれば、豊田市の場合の小規模集落の臨界点はどこか、そういうことも探りたいということで調査を始めました。

調査のポイントとして、集落の状態把握、集落状態の指標化、集落状態に応じた対策の検討、調査方法としましては、旭地区と下山地区の13集落を対象としまして、ヒアリングや集落出身者を含めたアンケートを実施するとともに、集落の今後の取組を考えるワークショップを開催しました。

集落の実態把握をする中で、共通して1から4に当

てはまるような、例えば「集落のためなら労働力が確保できないですか」、こういう4つの状況が見られています。また、本市の特徴としまして、農山村地域と都市部が30分から1時間ちょっとの距離で近接しておりまして、都市近接型過疎という状況にあります。また、頻繁に帰省する別居親族、仮に親密別居者と呼んでいるんですけども、親密別居者がおられまして、農山村出身の約90%が県内に在留しておる、うち45%が豊田市内に存在しているというアンケート結果が出ております。

全体整理としまして、同じ小規模高齢化集落でも集落人口や年齢構成だとか、集落活動の状況によって、集落機能の維持の状況が大きく異なることが分かっております。

こちらは集落タイプと指標の設定ということなのですが、共同作業だとかの集落の状態のような定性的な指標と、人口などの定量的な指標を組み合わせ、集落を4つのタイプに類型化して、集落状況を客観的に判断できるようにしようと思いました。

実態把握といいますと、必ずしも人口が少ないから元気がないということではなくてですね、どうも壮年者層の数ですとか、75歳以上の高齢化比率、このあたりが集落の元気に大きく影響しているというようなことが考えられます。

4つに分けたわけですが、タイプ1の「小規模高齢化集落予備軍」からタイプ4の「集落機能が著しく低下している集落」まで分類しました。タイプ3、4あたりに集落活動の臨界点があるように感じます。タイプ分けをしたということなのですが、対象地域に211もの集落がありまして、客観的な指標によって状況に応じたきめ細やかな対応を今後していきたいと、こういう思いでタイプを分けております。

ここにある4つの基本的な視点を置きながら対応策を進めるということで、例えばタイプ1、2と共助をベースとした取組を支援するというので、集落の基礎体力を生かした主体的取組を促していきたい。タイプ3、4では外部からの応援というものを使って、マンパワーの補完、支援することによって喪失機能の補完を促していきたい、ということを考えております。

このような昨年度の調査結果を踏まえまして、本年度は対応策のモデル的な施行と検証を進めております。具体的には昨年度と異なる地区での集落コーディネーター派遣によるワークショップの開催ですとか、集落応

援隊などの外部活力を生かしながら集落活動をサポートする仕組み作りについて取り組んでおります。集落応援隊につきましてはすでに草刈り作業が始まっておりますけれども、都市と農山村の顔が見える関係になるという、非常にいい機会を作っていることを聞いております。

このような農山村の一番弱い部分をサポートしようとする集落応援隊ですが、これを始めようとした背景には農山村を応援しサポートしたいという多くの都市住民の存在があります。合併以後、農山村と都市部の市民、地域、各種団体等との活発な交流が年々広がりを見せております。これは一例なのですが、例えばとよた都市農山村交流ネットワークでは、小学校が農家にホームステイするセカンドスクール事業を展開しております。そのほかにも、山里学校ですとか、地域リーダー養成講座、定住相談というような取組を進めております。

また、昨年、交流拠点施設が「里山くらし体験館“すげの里”」という愛称なのですが、昨年の5月にオープンしております。循環型の暮らしを具現化する薪ボイラーですとか薪ストーブ、太陽光発電などを導入しまして、農山村版スマートハウスというようなところを目指していますけれども、交流ですとか研修、相談の場として、また宿泊も可能となっております。ここを拠点とする「新盛里山耕流塾」さんにおかれましては、都市との交流を進める講座を、昨年度はのべ50回開催されまして、約1,900人の参加があったと聞いております。また、民間企業や団体との交流ということも進められておりまして、例えば企業の労働組合さんが農地を復元して農業体験に利用するだとかですね、また、企業が地域の里山整備を応援するですとか、都市部のボーイスカウトの受け入れというようなことで、企業や団体との交流も展開されております。

さらには、「日本再発進！若者よ田舎をめざそうプロジェクト」ということで、旭で展開されたプロジェクトなのですが、旭地区に定着した若者による新たな動きが見られますし、また、後程パネルディスカッションの澁澤先生からご紹介があると思いますが「豊森なりわい塾」の展開、また名古屋大学の高野先生が、空き家がちょっと足りないものですから、自分たちで、エコでおしゃれな住まいを作ってしまうおうということで始められた「千年持続学校」という取組がありまして、これらの動きがお互い連携しまして、交流から定住への動きが加速化しつつあります。都市と農山村の互いの強み

を生かして、またそれぞれの弱みを補いながら、都市と農山村が共生するまちづくりを進めていく必要があると考えています。

例えば、都市側のニーズとして、ライフスタイルの転換を図ろうとする定年退職者、また第二のふるさとを求める人たち、また新たな価値観を持って農山村に活躍の場を求める若者ですとか、子供に自然体験をさせたい、新鮮で安心して安価な農作物を求めるお母さん方、これらのニーズに農山村は応えることができます。都市と農山村とをもっとうまく繋げば、今の交流が大交流に発展する可能性が感じられます。今はまだまだ部分的なつながりにすぎません。もっともっと顔の見える関係になればいいと思っています。お互い求め合うものの情報を共有して、繋ぐ機能を一段と強化していく必要があります。

本日の分科会は「魅力ある山里と都市との共生」というテーマの設定がされております。本日の過疎問題

シンポジウムは本市のさらなる共生のために学ばせていただく非常に良い機会だと考えております。優良事例やパネルディスカッションをしっかりと参考とさせていただきながら、都市と農山村が支えあい、自立したまちを目指した取組を進めてまいりたいと思います。

御清聴ありがとうございました。

ちょっと蛇足ですが、非常に駆け足で紹介させていただきました。本市の取組状況は今日お配りさせていただいている「チャレンジガイド」、農山村振興の取組を「見える化」したもののなのですけれども、これにかなり掲載してありますので、一度ご参照ください。

またこちらに「山里暮らしの魅力発信」と書いてあるのですが、とよた山里暮らし通信員「おいでん・さんそんず」というものが今年発足しております、さりげない豊田市の山里の暮らしをブログで紹介しておりますので、こちらのほうも一度ご覧いただければと思います。

宮城県丸森町 | 特定非営利活動法人ひっぽUIターンネット

交流・移住・定住で地区を元気に！

特定非営利活動法人ひっぽUIターンネット理事兼事務局長 吉澤 武志

皆さん、おはようございます。今日は「新住民受け入れによる持続的な地域づくり、その効果と現状の苦悩」というタイトルで、NPO法人ひっぽUIターンネット理事兼事務局長をしています吉澤のほうから簡単にご説明をさせていただきます。

説明に入る前に、昨日の全体会そして交流会の中で多くの方と東日本大震災についてお話しすることができました。その中でこの豊田市の市の方々、愛知県全体の皆様にも非常に多くの支援をいただいたことを知りました。この場を借りて御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

また、ご紹介させてもらいたい人が一人います。このひっぽUIターンネットという組織において僕は理事兼事務局長となっていますが、僕は仙台からの移住者です。本日この賞を受賞したのは僕を受け入れてくれた地域の皆様だと思っています。今日は理事長をしています庄司が来ていますので、ご紹介させていただきます。

私たち移住者にとっては、地元の住民の方々がどれだけ熱意をもって受け入れてもらえているかによって、私たちの地域における立場も変わってきます。人を受け入れるという苦勞などは本当であれば地元住民の方が

話をするのがふさわしいのかもしれないのですが、今日は事務局長という立場上、私がさせていただきます。

簡単ですが、私の自己紹介をさせていただきます。私は1976年仙台生まれ、現在35歳になります。もともと東京の大学の大学院に行っていましたが、大学院の途中でNGO活動、国際協力、などということに目覚めてしまい、休学をして1年間、タイの農村で住むことになりました。当初は甘い気持ちで国際協力などと考えていましたら、逆に日本の農村の素晴らしさと、日本の中山間地をなんとかしないといけないということに目覚めまして、2004年に宮城県伊具郡丸森町筆甫地区という場所に移住しました。ここで農的な生活を送りながら、小学校の補助教員をしたり、壁も床もないような廃屋を自分で直して住む場所を確保する、などということを行っていました。現在は、地区住民全員で組織する自治組織の事務局長ということで地域住民の方に雇われています。私は行政職でもなくて、このようにちょっとドロップアウトしちゃった人間なので、農的な生活を送りながら食って行ければと思っているところで、地域の方に雇われて、地域づくり活動をやらせてもらっています。

今回、受賞をいたしました丸森町筆甫地区ですが、丸森町は宮城県の中ではいちばん南ですね。私はこの丸森町の中でも、さらにいちばん南の筆甫地区という場所に移住をしました。

今日も湯谷温泉の方からこちらの会場に向かっている中、非常に素敵な道路があったのですが、私たちのところもこのように道路一本、やっと車一台すれ違えるかどうかというような場所で暮らしています。ただ、こういう道路だからこそ地域住民のふれあいが生まれ、不便ではあるけれど非常にいい道路だと僕は思っています。

また、地域には、樹齢450年と言われているウバヒガンザクラ、ミズバショウの群生地。特産品として大根を輪切りしたものを一回茹でて干すという品があります。干している間におへそみたくなるもんで私たちこれを「へそ大根」と呼んでいます。こういうもののブランド化なども進めています。

さて、それでは本題に入ります。「筆甫の抱える課題と取組」。これはどこも同じかと思えます。少子高齢化、過疎化、担い手不足、遊休農地の増大、イノシシなどの獣害などが出てきています。さらに、筆甫には小学校があるのですが、出生者がいない年がでてくるとか、地



域をどのように維持していくかが課題になっています。

昭和20年代後半には3,000人以上いた地域が、現在760人。高齢化率が41%、小学校児童16名、中学校が閉校という状態になっています。このような状況に対し、地域住民みんな頭を悩ませまして、「筆」という文字を使った「筆まつり」を行ったりもしました。地域の歴史にある、たたら製鉄を行ったり、地元の郷土食を蘇らせようということで「食文化を堪能する会」を開催し、地元の住民が蕎麦屋さんをオープンさせたり、直売所をつくるか、とにかく地域をもう一回成り立たせるために何ができるかというのを、地域住民は一生懸命やってきました。

この結果、観光客が少し増えてきたり、メディアに取り上げてもらったりして、一定の成果があったのは確かだと思います。ただ、住民の年齢はどんどん上がってきますし、過疎化は決して止まらない。過疎化が止まらない中での暮らしのモデルを作らなきゃいけないという考えもあるのですけれども、やはり、それを作るのに、なによりも、やっぱり人がいないと成り立たないというのが、私たちの地区の現状になっています。

この「人」という課題を克服するのもやはり「人」。そんな考えから地域住民と外から来た移住者が手を取り合って地域を成り立たせていきましょう、という考えのもとで、平成15年秋、地域住民7名、すでに移住していた3名の計10名で、今回表彰していただきました「ひっぽUIターンネット」が設立されました。

なぜ、このような受け入れをする団体を作ったかということですが、一番大事なのは地域全体が外から来る移住者を受け入れる風土づくり、土壌づくりが僕は大事だと思っています。いくら個人が頑張っても「ああ、あの人が頑張っただけだね。」って話で終わっちゃうのです。そのとき、やはり個人ではなく組織であると、多くの人がこのような考えに賛同をしているのだ、といった雰囲気にもなります。その雰囲気が広まることで地域全体での受け入れの風土ができてきた気がします。また受け入れ組織があることでの問い合わせの確保であったり、個人負担の軽減などが、この組織を作った理由でした。

では実際にこの「ひっぽUIターンネット」がどのようなことをしているかといいますと、新住民の受け入れに関する相談をしたり、受け入れた後の相談・対応、あと移住希望者の増加を図るためにイベントを行ったりしています。地区内の空き家や農地などの情報収集、

「空き家バンク」として豊田市さんでもやられているようですが、そういうことをしたり、情報交換をしておりました。

ここでひとつ注意する点としては、私たちは「誰でもいいから来てください。」ではないのです。もともと地域を担っていく人材がほしいというのが根底にありますので、筆甫地区に何回でも足を運んでもらって、何度も地元の人と会ってもらって、地域の風習であったり慣例、近所づきあいを分かってもらう、というプロセスを非常に大切にしています。それは、空き家を探して、空き家を借りられるまでに一朝一夕でいかないこともあり結果的に一年とか二年とか時間が経ってしまうということもあります。移住者が地域に入って終わりではなく、入ってもらった後に、その地域のなかでどう暮らしていかけてもらうかが基本ですので、ここのプロセスというのは非常に大切にしています。入った後に、僕も地元住民の方にたくさん迷惑かけたでしょうし、理事長の庄司もかなり苦労したかと思うのです。受け入れるということには地域への責任も生じるのです。「なんであんな人受け入れたの?」とか「ああいう人来たら困るんだけど。」とか、そういうことがないように受け入れた後も、この地域ではこうやったほうがいいよ、とかアドバイスなどをするのも役割だと思っています。そういうことを言ってくれることも非常にありがたいと僕も移住者の立場からは強く思います。地域のならわしなどは言われないと分からないですから。

そして田舎暮らしを希望する人向けのイベントなどを行っています。先程言ったへそ大根作りの体験会なども行っています。

このような活動の結果、筆甫地区には人数としてはそんなに多くないのですが、12組の方、合計36名うち16名が子供、の方々に移住していただきました。ちなみに僕はこのD、30代、移住した時は20代で、団体職員となっておりますが、家族4人、子供が2人、仙台から移住という形になっています。「ひっぽUIターンネット」ができたのがちょうど平成15年ですので、僕が移住に関わった時にUIターンネットが立ち上がりまして、それからは、コンスタントに毎年一人か二人ぐらい移住者が入ってきています。味噌製造している方がいたり、木工だとかガラス細工、コーヒー豆の焙煎をする人がやって来たり、画家さんが来たりとか、非常に多種多様な面白い方々が移住しています。この方々というのは移住するまでにたくさんの地元の人に会い、色々な地



域の話聞いてきています。ですので地域をどうするといふ話でも盛り上がるのですね。そういう意味では地域の担い手としては非常に有用な人材ではないかなと思っ

ています。実際、移住者がどんな役割を果たしているかといいますと、消防団に入ったり、神輿の担ぎ手とか、神楽の後継者とか地域の後継者としての活動にも関わようになってきています。それ以外にも地域活性化の取組として餅つき交流会、ライブ、竹林整備とか、移住者各自がその人の興味関心に沿った事業に取り組んでいます。

このように筆甫地区に移住者が増えることでどんなことが起きたのか。まず、面白い方々が集まってきたことで、筆甫が移住者が集まる場所として認識されてきたことと、「移住者も元気だけど地元住民も元気」というような、キャッチフレーズ的なものができたことがあります。

あと、人が人を呼ぶということで、移住者が入るとその人を介してまた次の移住希望者がやってくる。そんないい循環が生まれて、人が人を呼ぶような形になってきました。ただ、じゃあ外から来た人だけが元気なのかというところではなくて、若い者が入ってくると地元の若い人と交流するので、地元の若い人も「ちょっと自分たちも頑張らなきゃな。」という雰囲気になることもあります。「若者が移住する里・筆甫」が地域の魅力になってきています。

私たちは決して若者だけの移住を求めているわけではないのですが、道路の問題、病院の問題、その他いろいろな問題を抱えると、年配の方は問い合わせがあったとしても「やっぱりこの地区では無理です。」という結論を出すことが多いです。それに比べ若い世代はチャレンジ精神もありこんな場所だからやってやろうと

いう人のほうが多いです。その結果若い人たちがたまたま集まっただけなのではすけれども、移住のターゲットは、僕たちは、どちらかというと地域の担い手を考えていましたので、結果的にはこのような形でよかったのかなというふうに思っていました。

このような移住者の流れができた要因としては、まずはしっかりと受け入れ組織があるということ。常時相談ができて、空き家情報の提供があって、さらに住み着いてもらうために地域の習わしとか人付き合いのコツをちゃんと伝えられる人がいるということ。あと、地元の住民の皆さんが非常に頑張っていたというおかげで、地域に受け入れの雰囲気、土壌ができてきたこと。これは私のような移住者にはわからないような苦労を本当にしていただいていると思います。本当にありがとうございます。地元の住民の方々が「移住者なんか受け入れてどうなるの。」「あいつらよそ者がきてどうなるの。」という方々を、「この地域をよくするためにはあいう人も必要なんだ。」と説得してくださっているという面があります。一方移住者も地域に溶け込むよう努力しています。移住者だけでまともになってしまうと、いかにも、外から来た人たちがなんかやってるよ、になってしまうのですけれども、私たちがやはりそうはなりたくないのです。一緒になって筆甫地区を盛り上げたいという思いがありますので、移住者だけでまともことはほとんどないですね。

このように筆甫地区では地元住民と移住者がともに手をとり地域づくりを行ってきました。このまま進めていくことで新たな地域像を描けるとも思っています。

と、本当であればここでうちの事例発表を終わりにしたいところなのですが、2011年3月11日14時46分に東日本大震災が発生しました。福島第一原発事故による放射能汚染が広まりまして、私たちの筆甫地区も非常に苦労しています。

もう一度場所を確認します。筆甫地区がここです。宮城県のいちばん南。これ福島県ですね。福島第一原発がここです。全村避難となった飯舘村がここです。

この放射能汚染が地域に及ぼした影響としては、残念ながら移住者数組が自主避難をしてそのまま地域を離れていってしまいました。ほかにも移住が決定していた人がキャンセル。移住希望の問い合わせも毎月3、4件、年間でいくと40件、50件くらいあったのですがそれがゼロですね。そして地域の資源が汚染されてしまって活用が難しいということがあります。山菜、キノコ、

生活で使っていた薪、酪農家の牧草、普段私たちが作っている野菜を食べていいのか。そういう状況の中で暮らしています。

私たち筆甫地区は、移住者と既存の住民が手を取り合って地域を成り立たせようということをやってきましたが、移住者が途絶えています。正直、これからも厳しいのではないかなというふうに思っています。そのような地域が今後、どこに活路を見出していくのかというのが、私たちの地域の現状の課題です。

もうだめだとあきらめてしまうのは簡単なのですが、そこに人が住んでいる以上はそこで暮らしていかなければいけないので、これをもう一回地域を挙げて、この問題をどう乗り越えていくかということを考えていかなきゃいけないと思っています。

以上、問題提起のような報告になりましたがここで終わりとさせていただきます。どうも皆さん、ありがとうございました。

島根県邑南町 | 邑南町

「A級グルメ立町」(攻め)と 「日本一の子育て村構想」(守り)を 核とした定住促進プロジェクト

邑南町長 石橋 良治

皆さんこんにちは。ご紹介いただきましたように、島根県邑南町の石橋でございます。まずもって昨日、本当に大変名誉ある総務大臣の表彰を受けました。今からお話しますことは、町民全員が参加しているプロジェクトなので、役場がもらったということではなくて町民全員がもらったとそういう思いを今感じております。この表彰を契機に一生懸命町民と協働の町づくりを進めていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

さて、お話しするテーマはA級グルメと日本一の子育て村構想、二つのいわゆる定住促進のプロジェクトでございます。お話をする前に、町の紹介をしたいと思えます。島根県は東西に長い230キロメートルの海岸線がございます。私どもの町は中山間地域でございまして、平成16年に2町1村で合併した人口1万2千人の、本当にのどかな、農林業を主体とした町でございます。すぐ行くと広島県の県境でございます。

そういう中で、このプロジェクトは昨年度からスタートした、まだほやほやの事業でございます。私は町長になっていろいろなことを思っているわけですが、決して弱音を吐かない、高齢化だとか少子化だとか限界集落だとか、絶対私は言わない。なんとか諦めずに、プラスをプラスに、そしてマイナスをプラスに変えていく、そんな思いがひとつ。それから、実はこの邑南町というのは合併した町、新しい町でございますけれども、なかなか呼びにくいのですね。「おおなん」と読んでいただけないのです。いつぞや日本経済新聞に「名前を呼びにくい市町村名の西の大関」と、こういう紹介がありましたので、「これはいけんね」と。ぜひこの邑南町を売っていきたく、名前を売り込む、これはやはりマスコミに対する戦略を考えていきたい、そう思いました。

それから同じく、いろいろな事業をやるのであれば、まずはA級だね、B級じゃなくてA級でやろうよ、というところ。あるいは、まずやるなら日本一を目指さうじゃないかと。これは職員の発案でこの名前が付いた

わけでありました。決して町長が押し付けた名前でもなんでもない。こうして差別化を図っていくということです。

もうひとつは、同じやっていくなれば、戦略が大事です。その場合に必ず、今からお話ししますけれども、数値目標というのを掲げよう。何年後にはこういう数字を目標として達成しましょうというところ。それから、ストーリー性があって、非常にわかりやすい物語、明確化、そして同時にこれをどどんいかに情報発信していくか。こういうことがこのプロジェクトへの私の特に強い思いでございます。

先程も筆甫地区のお話があったけれども、邑南町も人口の推移が40年前と比べてこのように減少しております。まさに右肩下がりで、高齢化率もこういうことでございます。これをなんとかしなきゃいけませんけれども、やはり特に若い方々を増やさないといふ数も増えない。このことが持続可能な町、地域社会に繋がっていかない。従って、まずは子育てだね、というところでございます。

やはり将来を担っていく担い手、これは私、逆に高齢者対策だと思っております。高齢者の方々を将来担っていく子供さんをどう増やしていくか。0歳から18歳人口が出ておりますけれども、平成22年には1,660人でございます。これを10年後には1,800人にしようという数値目標。これは、本当は並大抵のことではないと思えます。もともと減っていく予想でありますから、140人を増やそうという、10年後に、これは大変なことだなあと思っておりますけれども、なんとかこれを頑張って10年間をやり遂げたい、こういうふうには思っています。

実はマスコミ戦略でございますけれども、『女性自身』に今年の2月にこういう形で出ました。私どもはシングルマザーの方々のことは特に考えてなかったけれども、『女性自身』がこういう切り口で7ページにわたって書いていただいた。昨日の話ではございませぬけれども、邑南町で100万円あれば十分に年間生活できるね、というところを彼女が堂々と実名で言っているところでございます。いろいろマスコミの方に聞きますと、テレビ局にしてもまず『女性自身』にどんな記事が出ているのかということを目にするのだそうです。従って、テレビに全国放映してもらいたいために、まず『女性自身』に売り込んで出してもらおう。このことが功を奏したわけでございます。

日本一の子育て村のほんの例でございますけれども、保育所は今9つございますが、完全給食を無料でやっ

ている。あるいは小学校で、赤ちゃんをお母さん方が連れてこられて小学生との触れ合いをやっている。こんなことは全国では珍しいのじゃないかなと思います。

昨日もお話が出ておりましたが、やはり子供というのは未来の英雄でございます。それをしっかり位置づける。従って子育て環境を充実するわけでありますが、若い方々のお話を聞きますと、やはり経済的な問題、保育料等々、子育てにお金がかかるという話を聞きました。そんなことを考えながら先程の数値目標に向かっていくわけでありますけれども、とにかく、より育てやすい環境を作りましょうと、これが将来若者のUターン、Iターンに繋がります。

ということですが、邑南町の今やっている様々な子育て環境を洗いだしたわけです。邑南町のひとつ売りというのは、幸いに公立邑智病院という総合病院がございまして、ここには産婦人科の先生も小児科の先生もいらっしゃいます。これはいいんじゃないか。あるいは救急を売りにしておりますので、24時間受付をやっておりまして、ドクターヘリのヘリポートもすぐそば、病院の敷地内にあってすぐ飛んでくる。20分かけて大都市の病院に搬送できるという態勢が売りだろうというふうに思っています。それがまず、子育てに対しては、医療の問題は大事であります。

それから、豊田市さんでも色々やっておられますけれども、子供の医療費の無料化、これは中学を卒業するまででございます。あるいは、これはほんの一例でありますけど、女性を大事にしていきたいという思いから、不妊治療であるとか予防接種費用であるとか、妊婦検診費用であるとか、そういったものはほとんど全額、町でみている。

さらに、福祉のほうでございまして、保育料無料というところで、第1子目は国の基準の約6割でいいですよ。次に、やはり2人目3人目を生んでいただきたいので、第2子からは無条件に無料にしております。よく同時入所なら無料だという自治体もあるようですが、うちはそういうことではなくて無条件に無料にしている。これが本当に助かるね、という経済的な負担感をなくすという話があるわけでありまして。

もうひとつ、やはり売りは教育でございます。邑南町は8つの小学校、3つの中学校がありますけれども、統廃合を私はしていかない、とにかく地域の学校を守っていくということです。そのなかで今から考えることは、地域の課題を小学生、中学生が一生懸命大人と考えると、



提案をしていって、それをプレゼンテーションして課題解決型で貢献していけば、地域貢献することによって、それが将来、世界へも羽ばたける力に繋がってくるのではないかなと、こんな思いが実はございます。図書館司書も全11校、小学校も中学校も司書を配置して、非常に読書力が上がっているという話も聞きます。

一方、二番目のA級グルメの話もありまして、ここは関連がないかなと実は思っていましたけれども、最近特に言われるのは「食育が大事」というところで、このA級グルメの指導しているシェフであるとか研修生等々が小学校へ行って、出前で料理を教えたりしている。あるいは、地元にあります矢上高校の生徒がスイーツを研究していて、できればスイーツの甲子園に出ていきたい、こんなことで、高校を出た生徒が将来パティシエになりたいということで、観光協会にも今年一名就職しました。

従って、日本一の子育てとA級グルメというのは、子供を通じて非常に関連があるのではないかなと、こういうふうにも今、思っております。

いよいよA級グルメの話でございますけれども、邑南町は非常に素材が素晴らしい、これは審査委員長を務めていらっしゃいます平野レミさん、料理愛好家でいらっしゃいますけれども、そういう評価をいただいております。ちょっと挙げただけでも真ん中にはチョウザメ、キャビアであるとか、あるいは造り酒屋も3つございますし、お醤油屋さんもあるし、米はうまいし、ハーブ米というのですけれども、あるいはブルーベリー、野菜、サクランボ等々、本当にいっぱいあるわけですね。1ヘクタールに1頭しか飼わなくて自然放牧でやっている、いわゆる自然牛乳というのも非常においしい。こんなことがあるわけでありまして、これをじゃあどうやって販路拡大して皆さん方に喜んでいただける

かな、というところで、A級グルメということをおもったわけでありました。

数値目標の話をしていただきましたけれども、町村としておそらく初だろうと聞いていますけれども、農林商工連携ビジョンをこうやって作りました。そのなかで、A級グルメを柱にしなが、食と農に関する5名の起業家を輩出しましょう、それから5年後には定住人口をトータルで200人増やしましょう、それから観光入り込み客、現在60万人ぐらいでございますけれども5年後には100万人にしましょう、という目標を立てました。そのなかで、A級グルメで様々な事業をやることによって、邑南町に訪れていただく交流人口、起業家というのを増やしていきたい、というのが全体の話でございます。

情報発信の大切さということをおもったけれども、これは地元にあった米の倉庫を移築しまして、こういうふうにはデザイナーも入ってもらって、「Ajikura」という名前です。イタリアンレストランを直営で開業したわけです。これをA級グルメの発信基地、あるいは食の研究所という位置づけで今、シェフの研修制度の彼ら彼女たちが一生懸命働いて発信をしてくれている、ということでもあります。

全日空の広島のホテルの一流シェフがいらっっしゃいます。その方がたまたま邑南町の出身だったものですから、Uターンをお願いして今は30何歳でございますけれども、その方が指導をして頑張らせていただいている状況であります。

なぜ、こういうことができたかということ、総務省の地域おこし協力隊という制度があったからこそというふうに思っております。この制度を十分に活用しております。「耕すシェフ」というネーミングで、併せて映像クリエイターも協力隊制度を活用して、4名のシェフと1名のクリエイター、合わせて5名を協力隊でやっているということでございます。今日も安達君、来ております。昨日もパネラーとして活躍しましたけれども、彼女は横浜の出身で、どんどん、IT企業にいた技術を生かして、自分がやったことを発信してくれている、ということでもあります。やはり、地元との交流というのが大事でございます。YouTube等々を通じて生産者のライブをやっている、あるいはシェフの方々が農園を持ちましたので、有機無農薬で作るということで、その指導者の方々にお世話いただいて、そういった交流。それから一方で、スイーツを今、手掛けておりますので、

高校生も一緒になってやっている。そういった商品は実際に東京の3つの有名な劇場にも販売されております。高校生が作ったスイーツということで評判を生んで、ごく最近ではお中元に5,000個のスイーツの注文が舞い込んだということでございます。

私は人口にこだわっているわけでありまして、これは島根県が作っております「島根県の人口移動調査」の邑南町の状況でございます。年齢区分を切っ出ておりますけれども、ブルーのところ、これは19歳から64歳という一番の生産年齢人口に値するものと思っております。ここを増やしていかないと、将来ご結婚、あるいは出産ということで子供さんが増えないということでございます。

まず、ブルーのところを増やしようと思っていたところでございますが、幸いに平成23年度には、前年度に比べて増えました。34名であります。やはり島根県もそうでございますけれども、若者が入ってくるのはいいのだけれども、どんどん出ていく方がまだ多い。社会減が多い。それをなんとか今、克服している状況かなと、私は現段階で思っています。

あとは65歳以上の方は、これはやはり人生を全うされて亡くなるということでもあります。ここはまあ、いつまでも健康にという方法しかないと思っております。0歳から18歳人口、ここはまだまだ下がっております。今、年間で邑南町は出生数が70人ぐらいでございます。これを今後は毎年100人ぐらい生んでいただいて、10年間で1,800人という数字が出るわけでありまして、これは若干下げ止まりになってきているのではないかなと。このプロジェクトは23年度に始まったばかりですから、向こう9年間、本当に今から頑張らなきゃいけないというふうに感じております。

最後になりますけれども、マスコミに売ったという中で、やはりハッピーハッピー、幸せになりたい、明るい町のイメージということで、TBSの「もてもてナインティナイン」を誘致し、この番組始まって以来の16組のカップルができたということが非常に評判になりました。それから、11月にはそのうちの1組がご結婚されるということも決まりました。

とにかく、邑南町から全国に笑いと感動を今後とも与えてゆきながら、みんなが幸せになるように頑張っていきたいなと、こういうふうに思っております。

ご清聴どうもありがとうございました。